



明治の落語家 「三遊亭小圓遊」
(その一)

●「寄席文字が刻まれた墓」

祖師堂左側の墓地、「萬靈供養塔」の後方に入ったところに「習性院小圓遊日樂居士」と刻まれた墓碑が建っている。法名が独特のいわゆる「寄席文字」で刻まれ、左右側面には「明治三十七年八月二十九日」「初代三遊亭圓遊建立」とある。これらから落語家の関係する人物のお墓であることは間違いないが、どんな落語家だったのだろうか。

●「小圓遊」とは

そこでまず「初代三遊亭圓遊」という人物について調べてみた。三遊亭圓遊は、現在まで五代続く落語家の名跡である。その初代は明治時代に活躍した落語家（嘉永三年（一八五〇）〜明治四十年（一九〇七））で、高座で踊る「ステテコ踊り」で人気を博し、「ステテコの圓遊」と呼ばれていたとい

う。

この圓遊に「小圓遊」という弟子がいたという。三遊亭小圓遊は、東京出身の落語家で、本名を鳥羽長助（ちやうすけ）といった。十四歳で圓遊に入門し、「遊林」の名で少年落語家として評判を得、明治二十八年（一八九五）、二十五歳で真打となり小圓遊と改名した。その人気は絶大なもので、圓遊の後継者と目



小圓遊墓碑 ㊦正面 ㊧側面

されていたが、明治三十五年（一九〇二）八月二十九日に巡業先の尾道にて、三十二歳で亡くなったと記録されている。

●「小圓遊死す」

その小圓遊の死去についての記事が、当時の新聞に掲載されている。

「小圓遊死す」

筑紫の菅公一千年祭を当て込み松林若円と一座して九州地方に赴きし三遊亭小圓遊は、過日来備後尾ノ道の岩井座に於て興行中なりしが、去る廿九日午前三時、同所米屋町の旅店若加方にて胃腸加答（かた）児（胃腸が炎症を起こし、下痢や腹痛、発熱を起こす細菌感染が原因となる病気）に罹り遂に死去したり。同人は実名を鳥羽長助と云ひ、明治四年芝区今入町卅番地鳥長方に生る。幼少の頃より芸事を好み、朝太夫が麻布六本木に住居する頃、其弟子となりて各席に到り師匠の湯杯を汲み居たるが、親や姉の異見に従ひて一時芸人を思ひ止まり、其後明治十七年西久保辺

に素人芸の天狗連寄り集りし時、好む道とて又も其群に入り、万林と名乗り段々熱度を高めて、二十年頃遂に円遊の門に入り名を遊林と改めしが、親姉等も我を折りて、寧（いずくん）そ落語家で世を渡れと夫れより同人に力を添へる事となり、前座の頃より相応の身形（みなり）を拵（こしら）へ、抱へ車で往き通ひを為す中に、芸道次第に進みて二十八年の夏、芝玉の井亭にて真打ちの列に入りたるは同人が二十五歳の時なり。夫れより一層師匠の芸風を学び成田小僧、大原女、王子の翳間、本家平助、花見小僧など最も其癖を移して喝采を博し、又「ヨイシヨ」と云ふ言葉を高座にて遣ひ始めたるに因らずも人気を負ひ、高座に現るゝ毎に「ヨイシヨ」の掛声いと賑はしかりき…（後略）

（『京都日出新聞』明治三十五年九月三日）
今回の執筆にあたり調べたところ、小圓遊は常圓寺檀家の先祖に連なる方であることが確認できた。先に紹介したように墓碑には「明治三十七年八月二十九日」と銘があり、二年後の命日である。おそらく三回忌の折に、師匠圓遊が当山に建立したのであろう。